

小林勝作品集
1

小林勝作品集——第1卷 ©1975

一九七五年七月二〇日印刷 一九七五年七月二五日発行

著者——小林勝

装本——駒井佑二

発行者——臼井浩義

印刷所——大進印刷株式会社

製本所——中村製本株式会社

*

発行所——株式会社白川書院

東京出版部——東京都新宿区左門町三ノ四 ☎〇三—三三—三三四 下二六 振替東京二六四〇
本社——京都市左京区北白川追分町八七 ☎〇七—六—三九〇 下六六 振替京都九三
0383—755—3114

小林勝作品集

第1卷

編集委員

野間

長谷川

菅原

中野

重

四

宏

治

己

郎

宏

治

己

重

第1卷——目次

フォード・一九二七年

フォード・一九二七年——7

拉拉屯
ラーラートン——33

万年海太郎——49

軍用露語教程——81

日本人中学校——101

太白山脈——119

初期作品

引越しそば——161

斑猫チンキ
はんみょう——175

牛 201

鮎 231

赤いはげ山 237

犬 269

赤い壁の彼方 303

*

解説 長谷川四郎 347

解題 藤井 徹 357

フォード・一九二七年

フォード・一九二七年

——変だな、と彼は言った、だってお前は、そのトルコ人が町へやって来た時も、出ていった時も見ていなかったわけだろう？

その時彼の眼に、意地悪い嘲笑のかげが露骨に浮んだのをぼくは見た、彼は押しつけるように強い調子でつづけた。

——つまり、お前は詩人なんだよ、なあ、そうでないとしたら、また熱が出て来たんだ。

——見ていなかったって、ぼくにはすっかりわかるんですよ、とぼくは言った、そして烈しく咳きこんだ。

トルコ人が町へはいつて来たのは昭和のはじめだった、ぼくは乳飲児だった。トルコ人が町から出て行った時、ぼくは東京の外国語学校の生徒だった。しかし、ぼくにはその時の光景が見えるばかりでなく、話し声すら聞えてくるのだった。が、ぼくが何か言おうとすると、すぐ咳がつきあげて来た、ぼくは彼に説明するのを断念した。

部隊はもう引揚地めざして出発してしまっていた、そして済南の近くの、荒れ果てた丘の上にある民家の土間にアンベラをひいて、ぼくと彼が寝ころがっていた。ぼくは陸軍二等兵だった。そして、山奥から

ようやくここまで歩いて来て、倒れてしまった肺病やみだった。彼はぼくのつきそいであり、衛生兵の上等兵だった。彼が寝ているのは、体を痛めているわけではなく、ほかに何もすることがないからだだった。

ぼくは彼に背をむけた、ぼくの眼の前には土の壁がたっていた。そして視線をそろそろとあげて行くと、四角い小さな窓がぼっかりとあいていた、その窓のむこうに、真青な空があった。

——この大陸と地続きの遙か遠い空の下に……とぼくは口の中でつぶやいた。すると思わず、乾いた笑いがこみあげてきた。

洛東江のみなもとの山深い町のまんなかに、ポブラの樹にかこまれた広場があった、そこには、花壇があるわけでもなく、ベンチやブランコがあるわけでもなく、ただ小石のころがった広場というだけのものだった。が、町の人々はそこを何故だか「公園」とよんでいた。

初夏になると、ふきだして来たポブラの新芽の、ねばっこい、甘いにおいが公園をいっぱいにした。冬になると、乾いた牛の糞ふんのにおいが、風にのって、そこから町の中へひろがっていった。

「公園」は日本の各地方の名前にとりまかれていた、ポブラの樹のうしろに、東京堂（これは時計屋だ）大阪屋（これはうどん屋だ）信濃（これは乾物屋だ）ニュー・イサハヤ（これはカフェーだ、女給が二人いた）などという看板を軒に掲げた家がならんでいた。つまり、志をたてて日本の各地から、海を渡って、はるばるこの山奥までやって来た人たちはそれぞれ自分の出身地を代表して屋号をつけたのだった、それらの名前はたいいてい人々の記憶の中にあるものだったが、時には人々の首をかしげさせるような名前も、鉄道で運ばれてやってきた。

たとえば或る日の午後だった、軽便鉄道が終点であるこの山奥の町に到着した時、ニュー・イサハヤの隣りの空き屋に人がはいって来て白ペンキで窓をぬりつぶした、そしてそこに「アマルメ」という字が浮

き上った。

——アマルメだつて？ 何県なんだ？ 漢字じゃどんな字を書くんだ。

町の人たちは近所のよしみで早速その家に出かけて行つた、そしてこのお魚に似た名前の町は、山形県の鉄道の要所であることを知つたのだつた。こうして、この町の子供たちは大半が植民地生れであつたが、日本の地名や物産や、名物にいたるまで大變くわしかつたのである。

言い落したが、「公園」に面して、看板をかかげていない普通の日本家屋が一軒あつた。ポプラがひとしお生い繁つて、まるで小藪のようになってゐるあたりに、古い板塀でかこまれた小さな家があり、そこには警部補の一家が住んでゐた。警部補は鼻ひげを蓄えた大男だつたが、彼が祭日には、白い柄のサーベルと真白な手袋を着用し、大またで門を出て行く姿はまことに堂々としてゐた。そして、そのうしろから式のために登校する小学校五年生の息子が、クラスで一番小さな体をのめらせるようにしながら小走りについて行つたが……

その小学生が、つまりぼくなのだつた。

晩秋になると二日間、「公園」で牛市がひらかれた。牛はその山奥の町よりもっと山奥の村々からひかれて来て、「公園」から放射状に幾本も出ている街路からとぎれることなくはいって来た。そして朝の十時には、「公園」は茶色い牛と白い服を着た人で埋めつくされた。茶色い牛たちの大きな眼は、あわただしく駆けまわつたり、怒鳴りあつたりしてゐる人々を不安気に眺めていた、そして、「公園」からは牛たちの哀れっぽい鳴き声が町中にひびき渡つた。やがて牛たちは別の人間に鼻づらを引っぱられて、別の街路から出て行くのだつた。牛市がすむと公園はまえよりもいっそう淋しく静まりかえつたが、地面は以前になつたもので大變にぎやかになつてゐた、牛たちが大地にお土産を残してゐたのである。それは出来たての捲きパンのように温かそうな湯気をあげてゐたが、日一日と乾燥し、形もくずれ、大地の色と

大して変らなくなり、やがて風のない時でも散ってくるポプラの落葉にうずもれて、その所在さえわからなくなるのだった。

冬は太白山からやって来た。最初は、それほど強くない風が町へ吹いて来て、あらゆる街路へもぐりこみ、家々のガラス戸を鳴らしたりしながら進んだ、それから、それらの風は、それぞれの街路から突然この「公園」へ飛び出し、ぶつかりあい、小さな竜巻をおこした。すると、ポプラの葉と、粉々になった牛の糞ふんと土埃がまいあがった。ぼくの鼻は敏感に、そのかすかな、きなくさいにおいを嗅ぎつけた。風が吹いて来て、乾いた空気の中にそのにおいがただよいはじめると、——それは、もう冬だった、だから「公園」に家のあるぼくは学校へ行くと早速こんな具合に報告するのだった、

——今朝、公園で乾いた牛の糞ふんのにおいがしたよ。

——そうかい、じゃあ、もうすぐ冬がくる、とみんなは言い、校庭から北の方に見える太白山脈を眺めるのだった。

一月、二月と風は「公園」で荒れ狂った、雪がまじることもあった、ポプラの樹々は、無数の手を援けを求めるように鉛色の天空へつき出し、身をそらせてうなった。そして、ポプラの落葉も、冬のおいも、何時のまにかどこかへみんな吹きとばされてしまっていた。

そして三月になって珍しく風のない日に公園に立っていても、もう冬のおいはどこにもなかった、するとぼくは、ポプラが、吹き飛ばされた落葉のかわりに、また新しい葉を準備しているのに気付くのだった、ポプラの樹の中を澄みきった水が頂上めざしてぐんぐんかけあがっているのだ、とぼくは想像するのだった。空気を鼻から勢いよく吸いこんでも、もう鼻の奥がかわいたり、痛くなったりしなかった、大気はしめり気を帯びていた、公園から遙かしもての方に見える洛東江の水が日の光をとかしは始めているようだった、もうすぐ春が来るのだ。

そんな日には、ぼくはドングリ山へ出掛けた、山とはいっても、それは町はずれにある丘だった。丘の麓には、土塀で囲まれた朝鮮の民家があつて、みんな働きに出てゐるらしく、何の物音もせずしずまりかえていた。一番奥にある古い家の前をぼくらは足音をしのばせて通りすぎた、その家には「人喰い婆さん」が住んでゐるといふ噂があつた、さすがにもう「人喰い」などというものが実際にいるとは思わなかつたが、やはり何となくうす気味悪かつたのだった。その家を過ぎると、もう山の裾だつた、そこには朽ち果てた鉄条網の残骸があつた。ぼくらは、そんなものを無視して山へはいりこみ、艶のよいドングリをひろい集めるのに余念がなかつたが、申し合わせたように、中腹から上へは誰も登ろうとはしなかつた、何故なら、山の上には、西洋館があつて、そこには、トルコ人の一家が住んでゐたから。

その頃、町にはタクシーなんていうものは一台もなかつた。毎月海を渡ってくる雑誌には、東京や名古屋ではタクシーというものがあつて、それは四角い箱型から流線型のものに変わりつつあるという記事や写真がのつていた。しかし、しょせん、それは海をへだてた日本での話だつた、山の中のその町には乗用車はなかつた、まして自家用車なんていうものはなかつた。警察署長も自家用車をもつてゐなかつた、郡守のキムなにかしも、大地主の李なにかしも持つてゐなかつた、ポブラの広大な林を邸内に持つてゐる高利貸しの石上なにかしも持つてゐなかつた、十八も部屋のある家を新築して人々の度胆をぬいた拓殖銀行の坂本なにかしも持つてゐなかつた。

ところで、このトルコ人だけが自家用車を持つてゐたのである。

それはもはやひと昔前の（つまり一九二六、七年の）古ぼけたフォードだつた、四角い黒い車体は色もはげ落ちていたし、幌もしみだらけになつて、たるんでゐた、走るとぜいぜい苦し気な息をもらし、ひどく震動するのだったが、それはトルコ人が呉服商であつて、連日、この車で、でこぼこの山道を走りまわ

ったからに相違なかった。とはいえ、このフォードが町中でただ一台の自家用車であることに変りはなかったのである。

町では誰でも知っていたが、トルコ人は、昭和のはじめに、鉄道によってではなく、この車にのって、町へあらわれたのである。

その時は、洛東江にかけられた鉄筋コンクリートの壮大な橋などなかった。僅かに、水面から五十センチメートルほどの高さにかけている木造の橋がかかっていた。

真夏の、風のぼったりと途絶えた、実に熱い日だった。上半身を日にさらした多勢の朝鮮人たちが、肩や腕の筋肉をたくましく盛りあげながら、橋の上から投網をうっていた、洛東江は、深々と澄んでいた、ひきあげられるこげ茶色の網の間に、きらきらと鱗が光った、子供たちが足を水にひたしながら橋に腰かけ、瓜をくいながらそれをみていた。突然、対岸の赤茶けた山かげから自動車があられ、木造の橋をがたがたゆすりながらやってきた。

たくさんの日本人がこの町へはいつてきたが、それはみんな軽便鉄道でやってきたのであって、こんな具合に自動車で橋を渡って来た者は、はじめてだった。しかもその自動車は、フォードの新品で、しみ一つない灰色の幌もびんと心地よく張っており、真黒な車体も、洛東江の河原を埋める無数の雲母に反射してびかびか光っていた、車体の背中には予備タイヤが取りつけられていたが、ゴムの新鮮なおいを放って、まだ一度も大地のにおいに染んでいなかった。朝鮮人たちは、もう日本人はみなれていた。遙かに昔、この山奥へ最初はカーキ色の軍服を着た兵隊がやって来た、それは独立歩兵大隊だった、その附近を中心にしておこった暴動が兵隊の銃剣でつぶされてしまってから何年かたった。すると警察がやってきた、商人がやって来た、銀行の支店がやってきた、金貸しがやってきた、裁判所がやってきた、学校の先生がやってきた。町の朝鮮人が日本語を覚えた、そして兵隊はもういらなくなったので、居なくなった。日本

人はこうして、みなれてしまった。が、新品のフォードにのっているのは、鋭いカギ鼻と青い眼をもったトルコ人の夫婦だった。いっそう驚いたことには、日本人とちがってこのトルコ人は、愛想よく笑いなから手をふった、彼等はそんな具合にして町へはいって来た。

それからトルコ人は町の西側につづいていいる小高いドングリ山を安い値段で買いつた、その山はドングリの木でおおわれていた、子供たちは平気でその山へはいりこんでドングリを拾った。そこでトルコ人は山がすでに自分の所有にかわったこと、私有財産は尊重すべきこと、などを明瞭に示すために、麓一帯へ、まぶしく光る有刺鉄線を張りめぐらした、それで子供たちは、それまでの二倍の道のりを歩いてドングリをひろいに行かねばならなくなったのである——鉄条網がびかびか光っていた間。

トルコ人のフォードは移動する商店だった、彼は軽便鉄道で運ばれてくる呉服を車にいったい積みこんで、いっそう深い山の中へもぐりこんで行った、何年かのうちに、ドングリ山の頂上の樹は切られ、地ならしをされ、それまでのバラックのかわりに、かなり大きな西洋館がたつた。その西洋館には、町の話題になったほど大きな四角い煙突がつき出していた。冬になってその煙突から、威勢よく煙が吐きだされると、そのドングリ山だけが、どこか遠い、西洋の国のように見えたのである。

何年かたつうちに、このトルコ人について一つの噂がひろがっていった。それは、馬鹿々々しい程たいのないものであったにもかかわらず、泰平無事に暮らしていたこの町の人々の中に、かなり違った意見をもたせることになった。噂というのは、トルコ人は呉服商だけのしろものではなくて、実はキリスト教の宣教師だ、というのだった、彼が呉服を山の中に売りに行くのも、布教をかねている、というのだった。

この噂を真実らしく見せたのは、日曜日になると、きまって、清潔な身なりをした朝鮮人たちが、多勢ドングリ山のトルコ人の家へ集ることだった。教会のないこの町では、トルコ人の家を教会の代用品として使っているのだ、という噂だった。

町の日本人のなかでも、時計屋の東京堂や酒屋の近江屋のおやじたちをはじめ高利貸しの連中は、この噂を頭から信じこんでいた。

ぼくの家に東京堂のおやじと、郡庁の両角さん（これはモロズミとよぶのだ、長野県に多い名前だ）がたまたま来合せた時、この噂は、論争の形をとった、なぜなら両角さんは年こそ若くて、夜ごとにマンドリンをかきならす人だったが、町では知識人の仲間いりをしていて、東京堂のおやじや、（同県人であるにもかかわらず）信濃の主人のいぐさなど常日頃軽蔑していたからだ、そしてこれは両角さんにかぎらず、銀行や、郡庁や裁判所などに勤めている人々には、何となくそんな傾向があった。

——何といったって、つまり、一挙兩得というもんですから、と東京堂のおやじはゴマ塩頭をふりたてながら言った、彼の言葉は東京の落語（とわざわざことわったのは、ぼくらは東京と大阪の放送を半々ぐらいにきいたから）のように歯切れよく、そして断定的だった。

——一挙兩得って何がです、と両角さんは、にやにや笑いながら言った。

——何ってあんた、そんなこと、きまっています。山奥へ行ってすな、まずキリスト教の説教をしましょう、それから品物を売りますな。品物が売れなくなつて、説教しただけでも、得をしたわけですよ、牧師ですから。わしら日本の商人は、お経をとなくて品物を売るってわけにはいきませんから、得ですよ、牧師ってのは。

——誰が牧師だと言ったんです。

——誰ってあんた、そりゃあ、としばらく東京堂のおやじは黙りこんだ。

——第一、トルコ人ってのは、宗教上はマホメット教、つまり回教徒に属しているんですよ、両角さんはゆっくり言った、彼は反応をたしかめるように上眼づかいに東京堂のおやじをじっと見つめた、朝鮮にはトルコ人のキリスト教宣教師なんぞいませんよ。アメリカ人、イギリス人、オーストラリア人などです

がねえ。

しかし、東京堂のおやじはただちに反撃した、彼の丸い眼は、彼が時計を修理する時のようにかすかにほそめられ、両角さんの脳の中に故障している箇所をさぐり出そうとして鋭く光るのだった。

——むずかしいことは知りませんがな、しかしですよ、日曜日には朝鮮人が集りますよ。ね、あれはトルコ人の家を教会にしているんですよ、と東京堂のおやじは言って、一安心したように、ほんとと眼の緊張をといった。が、両角さんは、いかにも嬉しそうな笑いをたてたのである。

——まちがっていますね、と彼は言った。朝鮮へ来ている宣教師はね、みんな、本国から伝道費を送ってもらっていますね、立派な教会をたてていますよ。教会というのは、何といっても、キリストの具体的象徴ですからね。

こんな具合で、二人の見解はくいちがったまま、一致することがなかった。

しかし、日曜日にトルコ人の家へ出掛けて真偽をたしかめるといふ実証的方法に町の人々は気付かなかったか、あるいは気付かないふりをしていた、というのは、日本人たちは、それぞれ郷里の仏壇から、遙々この洛東江の山奥まで浄土真宗だとか曹洞宗だとか日蓮宗だとかいうものを背中にしよってやって来ていて、そのためにキリスト教には理由不明の反感を持っていたのである、更に、——これは公然と口にする人もいたが——朝鮮人なんかと友達づきあいをしているトルコ人のところへ行くのは、わざわざ朝鮮人と対等関係になろうとするものだ、という考えがごく普通にあったのである。

それはともかくとして、日曜日の午後になると、トルコ人はきまって、朝鮮人たちを五人だけフォードに乗せ、町をひとりまわりするのが例になっていた。フォードががたがたと体をゆすりながら、埃をまきあげて町の中を走ると、日本人たちは、まるっきり無視するか、或いは誇りを傷つけられたような顔をすのだった、そして、トルコ人をにらみつけるのではなくて、恐らく生れてはじめて自動車などにのって